

# Twitter を用いた大学間授業実践

今井 福司\*1, 岡部 晋典\*2

本報告では、Twitter を用いた大学間での授業実践について述べる。現在 ICT の活用が幅広い分野で求められており、Twitter は ICT 活用のメディアの 1 つとして挙げられる。今回は異なる二大学間で電子書籍に関する同一の課題を設定し、Twitter を用いて発言させる演習を行った。それぞれの授業は曜日も時間帯も異なっていたが、Twitter を用いることで、互いの受講生の交流を実現でき、協力要請を行った大学図書館員の授業参加を容易に行えた。授業後の受講生に対するアンケート結果では、授業に対する積極的な評価がある一方、授業計画の見直しや、教材について改善が必要であることを示唆するような評価も見られた。

キーワード：大学間連携、電子書籍、Twitter、授業実践報告、ICT

## 1. はじめに

情報技術を利用したコミュニケーションである、ICT (Information and Communication Technology) の活用が様々な分野で提唱されてきている。その中でも、現在注目を浴びつつあるのが、ミニブログサービスの Twitter である。Twitter では 140 文字までの「つぶやき」を交わしながらコミュニケーションが行われる。個々のユーザーの「つぶやき」は通常 Web 上で公開されているため、一人一人の発言は簡単に閲覧することができるが、ユーザー登録を行い、個々のユーザーを「フォロー」することで、複数のユーザーの「つぶやき」が同一画面上に表示されるようになる。これは「タイムライン」と呼ばれ、発言の時系列順に様々な発言が表示されていく。この「タイムライン」で表示されるメッセージはフォローの対象としているものだけなので、表示される「つぶやき」もユーザーごとに異なる。著名人の「つぶやき」が表示される「タイムライン」を持つユーザーもいれば、自分の友人・知人だけの「つぶやき」だけが表示される「タイムライン」を持つユーザーも存在することになる。

図書館員、学生や図書館関係の研究者の間でも Twitter は広く使われている。Twitter 上ではある特定の分野に興味を持っている人、共通の属性を持った人たちのことを「クラスタ」と呼ぶ慣習がある。この慣習に従えば、図書館員や図書館に興味を持つ人たちは「図書館クラスタ」と呼ばれる。「図書館クラスタ」は、通常、Twitter 上で図書館関係のニュースに対する議論や各種アイディアのやりとりをしているが、こうしたオンライン上のやりとりにとどまらず、Twitter をきっかけとして、他図書館の見学ツアーの

実施、研究会・勉強会が実現するなど、オフライン上でのイベントに結びつく事例も見られる。また、これらの取り組みは図書館員同士のつながりにとどまらず、アーキビストや学芸員、システムエンジニア、研究者といった異業種とのつながりをも生み出している。ほぼ匿名で参加することが可能なサービスにもかかわらず、実社会と密接にかかわる使い方が行われている。海外の事例ではあるが、大学の授業で図書館員が、Twitter 上で行ったレファレンスの実践も報告されている<sup>2)</sup>。

筆者らは、大学で情報技術の活用や情報リテラシーを教える授業を担当している。それぞれの大学は関東、関西と地理的に離れており、通常であれば授業の連携には困難が生じる。しかし、今回 Twitter を用いて、両者の授業を連携させる実践を展開できた。本報告はこの実践の概要を説明し、授業後に実施した受講生に対するアンケートの結果を踏まえて、こうした実践の意義について検討することを目的とする。

## 2. 実践の概要

### 2.1 連携までの経緯

Twitter の講習会は、これまで様々な場で行われてきた。しかし、筆者らは他人とのつながりを積極的に発生させる Twitter を、閉じた講習会内部で研修として扱う行為そのものに矛盾を感じていた。むしろ、Twitter といったソーシャルツールの利点を理解するには、外部の他人とつながる感覚を体感することこそが重要であると考えた。そのため、今井の勤務校である青山学院大学と、岡部の前年度の本務校である千里金蘭大学をつなぎ、大学間で連携をとりながら演習を行うことで、より実際に即したソーシャルツールの利用を体感してもらうことにした。

当初はいずれかの大学の講義時間を変更し、同時刻に Twitter 上でメッセージをやりとりする演習を行うことを企図していたが、互いの授業時間帯が大きく異なっていたため実現しなかった。そこで、互いの演習は別々の時間に設定しつつも、講師は双方の時間に Twitter を介して参加

\*1 いまい ぶくじ 東京大学大学院教育学研究科

\*2 おかべ ゆきのり 近大姫路大学教育学部

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東大教育学部内図書館情報学研究室 (2F 221) 今井福司

Tel. 03-5841-3976

(原稿受領 2011.5.13)

するようにし、外部との連携が常に行われるよう計画した。また受講生には、授業時間外に Twitter 上で、もう一方の大学の受講生が発するメッセージへ返答するように促した。これにより、メディアの接触時間が異なっても同じ経験を追体験でき、いわば「擬似同期」を体感できるようになった。

## 2.2 授業の目標・実施日時

本授業における目標やねらいは以下の3点である。

- 1) Twitter というツールの使用方法を学び、Twitter を使った基本的なコミュニケーションが図れるようにさせるとともに、学校の外部とのつながりを意識する。
- 2) 電子書籍といった新しい情報メディアに関心を向け、それら新しいメディアに対する自分の態度・意見が表現できるようにする。
- 3) 気軽な発言が許されている場こそモラルや作法といった情報倫理が重要であることを理解する。

授業を行った日時や参加者は以下の通りである。

- ・実施期間：2010年11月30日(火)～12月9日(木)
  - ・授業1：千里金蘭大学「情報処理論」  
火曜日 10:30～12:00, 1週目3名, 2週目5名参加
  - ・授業2：青山学院大学「情報メディア利用論」  
木曜日 18:00～19:30, 1週目10名, 2週目8名参加
- 上記の通り、授業は2週に分けて実施した。ほとんどの受講生は2週とも参加している。

なおコミュニケーションの多様性を確保するために、千里金蘭大学の大学図書館の図書館員1名に協力を要請し、全ての授業時に Twitter 上で発言を行ってもらった。図書館員は図書館の端末より Twitter にアクセスし、授業をうけている「ふりをする」仕組みであった。

1週目の教材としては『週刊ダイヤモンド』の電子書籍特集を用いた<sup>3)</sup>。これを採用した理由は以下の2つである。1点目は、今井は司書教諭講習科目、岡部は情報リテラシー養成科目を担当としており、講義の目的やねらいは異なっているため、共通に議論できる話題を取り上げる必要があったからである。2点目は、iPad や Kindle の登場によって電子書籍はカレントな話題になっていることから、受講生に関心を持たせ、活発な発言を促すことのできるテーマだと考えたからである。

2週目の授業素材は障害者のためのデジタル録音図書規格 DAISY (Digital Accessible Information System) と電子書籍のフォーマット EPUB (Electronic Publication) についての解説記事<sup>4)</sup>を用いた。これらは障害を持つ利用者に対し、電子書籍がどういった役割を果たせるのかを知るために有用であり、1週目の内容に深みを与えられる内容であることから用いた。

これらのテーマを扱うにあたって、以下の工夫を行った。Twitter はさまざまな話題が「タイムライン」に流れるサービスであるが、特定の話題をまとめて議論したいという場合がある。その際に用いられるのがハッシュタグという文字列である。これは利用者同士の合意で用いられ、半角記

号シャープと英字列からなる。このタグを発言の際に付与することにより、発言をたばねて可視化し検索することが可能となる。本実践では1週目は#aktwitter というハッシュタグを用い、2週目は#aktwitter2 を用いて2回のどちらの授業に対してのコメントなのか区別できるようにした。

## 2.3 授業の流れ：1週目

1週目は以下のことを行った。はじめに、Twitter をとりあげる意義を説明し、Twitter が社会にどのようなインパクトを与えているかを説明した。次に、Twitter 上でのコミュニケーションの特性やマナーについて解説した。その上で、実際に受講生にアカウントを取得させ、教材を読み込むと同時に感想をポストさせる課題に取り組みさせた。例えば、以下のような「つぶやき」が行われていた。

青山学院大学の受講生 A：資料を読みました。電子書籍がどんどん普及するとこれから著作権の問題が深刻化しそうですね。#aktwitter

岡部：@ (受講生 A のアカウント名) そう！著作権の問題はだいじですね。一足先に完全な電子化（というか頒布化？）を実現した音楽は著作権で苦しんでいますよね。どういうモデルだと解決できるか、ちょっと調べてみると面白いですよ。#aktwitter

このようなやりとりを行った上で、授業外の課題として、同雑誌の特集の別記事<sup>5)</sup>を実際に読ませ、感想を投稿させた。また Twitter の認証アカウントといわれる著名人を探し出し、それを3人以上フォローせよという宿題も課した。

結果として1週目には、千里金蘭大学の授業時間中に83、授業時間外では43の「つぶやき」が行われた。そして、青山学院大学の授業時間中には157、授業時間外では74の「つぶやき」が行われた。

## 2.4 授業の流れ：2週目

2週目は、前回の授業で出題した課題の確認を行った。そして DAISY と EPUB についての解説記事を見せ、それに対する意識について意見を「つぶやき」として投稿するよう指示した。その際には RT (Retweet) という、他人の意見を引用しつつ、自分の意見を発表する方式を指導し用いるようにさせた。この回では次のような「つぶやき」が行われた。

青山学院大学の受講生 B：(DAISY について) 読書に障害を持っている人々に対してのバリアフリー対策は今までされてなかったので、非常によい政策だと思いました。

今井：@ (受講生 B のアカウント名) こういうところにお金を回していけばよい感じになるのかなと思っています。#aktwitter2

2週目には、千里金蘭大学の授業時間中に103、授業時

間外に 62 の「つぶやき」が行われた。そして、青山学院大学の授業時間中には 149 の「つぶやき」が行われた。授業はここで終了としたため、その後は電子書籍等の話題といった、授業に関連したつぶやきは見られなくなった。

以上が実践の概要である。次章では本実践について、最初に筆者らによる振り返りによって授業の効果について検討する。そして、授業後の受講生アンケートの結果を用いて受講生からの評価を検討する。

### 3. 授業評価

#### 3.1 授業の効果について

まず、授業の効果についてである。今回の企画では通常の授業とかなり異なった興味深い現象が見られた。例えば、授業にそれほど熱心に出てこない受講生が、他大学の授業に携帯電話で参加し、積極的にコミュニケーションをはかるなどの貴重な姿勢も見られた。必ずしも当人はそれまでの受講態度からは熱心な受講生ではなかったが、Twitter を扱っている期間中はわれわれが驚くほどの熱心さをもって受講する姿勢が見られた。一方、授業に遅刻した受講生が電車内で書き込み、あたかも教室内にいるようなそぶりで行き込みを行ったりしていたケースも見られた。

また通常の授業におけるコミュニケーションは、講師と受講生の間だけに限られがちである。しかし、本実践では大学図書館員からの意見が投稿されることによって、異なった視点による意見を「タイムライン」へ反映されることができただけでなく、講師と受講生の間以外でのコミュニケーションを促すことにもつながったと考えている。

#### 3.2 受講生アンケートの結果

本実践に対する受講生からの評価や意見を把握するために、2 週目のそれぞれの授業時間の最後に、放送大学のオンラインアンケート REAS (Real-time Evaluation Assistance System) を利用し、受講生に対するアンケートを実施した。

具体的な設問は表 1 のとおりである。

以上の設問項目を REAS に入力し、2 回目の授業終了直前に、教員立ち会いの下、受講生に入力させた。受講生以外の人物がアンケートに回答しないよう、アンケートにはパスワードを設定し第 2 回目の授業時に口頭で指示した。

アンケートには、千里金蘭大学が 7 名 (受講生 6 名と大学図書館員 1 名)、青山学院大学が 8 名 (受講生 8 名) で、合計で 15 名が回答した。授業の出席回数の内訳は、2 回とも出席したのが 10 名、「2 回目のみ出席」が 5 名だった。

##### 3.2.1 Twitter の利用経路について

本項ではアンケート結果を検討する。まず、問 3 から問 13 の単純集計を見ていく。問 3 は授業外での Twitter 利用手段について聞いた。回答としては「携帯電話やスマートフォン」が 6 名、「大学の実習室の PC」と「自宅の PC」がそれぞれ 5 名、「大学図書館の PC」の 1 名、「授業外でアクセスしていない」と回答したのは 3 名であった。

表 1 受講生アンケート設問一覧

	設問内容	選択肢
問 1	受講生の所属	千里金蘭大学/青山学院大学
問 2	授業の出席状況	2 週とも参加/2 週目のみ
問 3	授業外での Twitter 利用手段	大学の実習室の PC/大学図書館の PC/ネットカフェや公共図書館の PC/自宅の PC/携帯電話やスマートフォン/授業外でアクセスしていない
問 4	(受講生について) 授業に対して意欲的に取り組んだ	「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの 5 段階評価
問 5	(受講生について) 授業外でも Twitter のことを調べた	
問 6	(受講生について) 授業で出された課題の作業量は負担が大きい	
問 7	(受講生について) Twitter についてよく理解できた	
問 8	(受講生について) Twitter について興味を持てた	
問 9	(教員について) 授業の準備がされていた	はい/いいえ
問 10	(教員について) 教員の説明は適切だった	
問 11	(Twitter について) 顔見知りでない人に積極的なリプライを行ったか	(自由記述)
問 12	(Twitter について) Twitter 類似サービス (mixi ボイス, GREE ひとことなど) を使ったことがあるか	
問 13	(Twitter について) 今後 Twitter を使おうと思うか	
問 14	(Twitter について) 「本授業を受ける前」に Twitter にどのようなイメージを持っていたか	(自由記述)
問 15	(Twitter について) 「本授業を受けた後」では「授業前のイメージ」がどう変わったか。また変わらなかったか。	
問 16	その他授業に対するコメント	

##### 3.2.2 受講生、教員の授業に対する取り組みの評価

問 4 から問 8 は受講生自身の取り組みの評価について、問 9 から問 10 は教員の評価について、それぞれ「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の 5 段階で評価してもらった。

問 4 から問 8 の受講生自身の評価では、「授業に対して意欲的に取り組んだ」「授業外でも Twitter のことを調べた」「授業で出された課題の作業量は負担が大きい」「Twitter についてよく理解できた」「Twitter に興味を持てた」の 5 項目について質問している。それぞれの回答の傾向は表 2 のとおりである。

表 2 を見ると、「授業に対して意欲的に取り組んだ」と

表2 受講生の自身に対する取り組みの評価

	授業に 対して 意欲的 に取り 組んだ	授業外で も自分で Twitter のことを 調べた	今回の授業 で出された 課題の作業 量は負担が 大きい	私 は Twitter について 良く理解 できた	私 は Twitter に興味 が持て た
全くそう思 わない	1	2	2	0	0
あまりそう 思わない	0	2	8	1	1
どちらとも 言えない	1	2	3	2	1
ややそう思 う	8	8	1	6	7
非常にそう 思う	5	1	1	6	5

いう設問については、15人中、13人が「ややそう思う」「非常にそう思う」と回答していた。他の設問も「課題の作業量は負担が大きい」という設問を除いては、大半が同様の回答傾向を示している。なお「課題の作業量は負担が大きい」については15人中10人が「あまりそう思わない」「全くそう思わない」に回答していた。これらの回答を見る限りでは、ほとんどの受講生が意欲的に取り組み、授業外でTwitterのことを調べ、Twitterを理解し、興味を持ったことが伺える。また、課題の量も多すぎるほどではなかったと評価したと思われる。ただし、一方でTwitterに対して興味を持っていないという受講生も存在していた。この点については3.2.4で改めて考察する。

問9、問10では教員の授業に対する取り組みについて「授業の準備がされていたか」「説明は適切だったか」の2項目について質問を行った。結果、2項目ともに「非常にそう思う」と回答した受講生が大半を占め（準備が11名、説明は13名）、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」に回答した受講生はいなかった。よって、授業準備、授業での説明は適切だったと考えられる。

### 3.2.3 Twitterの利用に関して

問11から問13は、Twitterの利用に関する質問である。

まず問11では受講生がTwitterで積極的なコミュニケーションを行おうとしたかを判断するため、Twitterの一機能であるリプライを授業以外の場面で行ったかを聞いている。ここでは「はい」が9名、「いいえ」が6名だった。次に、問12は授業前にTwitterの類似のサービスを使ったことがあるかどうかの設問である。「はい」が9名、「いいえ」が6名だった。

そして、問13は授業を受けてみた上で今後ともTwitterを使おうと思うかについての質問である。「はい」が11名、「いいえ」が4名と比較的多くの受講生がTwitterを使い続けると回答していた。

### 3.2.4 授業参加によるTwitterに対するイメージの変化

問14と問15は授業前と授業後それぞれでTwitterに対してどのようなイメージを持っていたかについて質問し

た。なお、イメージの変化を明らかにするため、自由記述の形式で回答させたが、「授業前には～というイメージを持っていた」「授業後には～というイメージになった」「授業を受けたけれど～というイメージは変わらなかった」などと記述形式の例を示した上で回答を行ってもらっている。

回答された記述について、イメージがどう変化したかを検討したところ、Twitterに対して積極的な反応をしたケースと、消極的な反応をしたケースに分かれた。

積極的なケースとしては、以下の3つが挙げられる。

1 つめは、それまではTwitterの扱いは難しいと感じていたが、授業後には容易であると認識を変えたケースである。例えば、「難しい」とコメントしていた受講生が、授業後には「簡単と思った」というコメントを寄せている。

2 つめは、授業前は興味がなかったが、授業後は興味が出てきたというケースである。授業前は「興味などなかった」というコメントを発していた受講生が、授業後には、「興味を持っています」とコメントを寄せている。

3 つめは、授業前には積極的に利用しようと思わなかったが、授業後には利用しようと思ったというケースである。例えば、ある受講生は、授業前には「単に芸能人のつぶやき」を読むだけだったが、授業後には「どんどん活用してみようと思いました」とコメントを寄せている。

この3つはどれもTwitterに対して好意的な評価であり、授業によって好意的な評価やイメージを持たせることができたことが示唆される。

一方で、数は少ないがTwitterに対して消極的なケースも見られた。以下の3つが例として挙げられる。

1 つめは思ったよりも難しかったというケースである。例えば、ある受講生は「想像以上に難しかった」「携帯から使いにくい」とコメントし、Twitterを今後使わないと回答していた。想像以上に難しかったのは、Twitterの性質によるものなのか、教員の指導によるものなのか議論の余地があるが、何らかの再検討が必要だと思われる。

2 つめは責任が生じるから今後は使いたくないというケースである。ある受講生は「みんなに見られていると思うと責任を持って取り組まなくてはならない」とコメントを寄せ、今後はTwitterを使わないと回答していた。

3 つめは、すでに様々なコミュニケーションツールを使っているために、Twitterに取り組む余裕はないと考えていたケースである。例えば、ある受講生は事前のTwitterのイメージについて「ネットコミュニケーションの類をたくさん行っているのでもう手がつけられない」と述べていた。この場合、個人のそれまでの経験が作用していると思われるが、なぜTwitterを取り上げるのか、その意義を説明が十分できていなかったとも考えられる。

以上が受講生アンケートの結果である。母数は決して大きくないが、Twitterに対して積極的、消極的なコメントがそれぞれ見られた。特に消極的なコメントの中には、授業展開の改善や工夫を求めるようなものも見られた。今後教材や指導方法を含めて見直す必要があるだろう。

## 4. おわりに

### 4.1 本実践の意義

以上の評価を踏まえた上で、本実践の意義、Twitter を導入した効果や今後の実践に対する留意点を検討する。

まず授業そのものの意義を、2.2 の「授業の目標・実施日程」で提示した3項目と対応させつつ検討する。

第一に、Twitter を使った基本的なコミュニケーションや外部への意識については、全員が「つぶやき」を行えたことから、基本的な操作方法については、全員が身につけたと思われる。外部への意識については、一部の受講生が「みんなに見られている」とコメントしている点から、全体とまでは言わないが一部の受講生に対しては意識させることに成功したと思われる。

第二に、電子書籍への関心や自分の意見の表現についても、題材に対して何らかのリアクションが受講生からあったことから、自分の意見の表現はできていたと思われる。

第三に、「モラルや作法といった情報倫理」の理解については、授業内の「つぶやき」やアンケートからでは十分に分らなかった。評価の方法等も含め今後の課題としたい。

以上の点から、授業の目標・ねらいに対応して、一定の効果はあったと考えられる。もちろん、評価できていない要因も多く見られるため、これらの要因を測定することが今後は求められるだろう。

### 4.2 Twitter を導入した効果

次に、Twitter を導入した効果を3点挙げる。まず、Twitter は接続元や接続媒体を問わないサービスで、PC からだけでなく、携帯電話からも気軽に投稿ができるメディアである。大学においては教室外からアクセス可能であるため、大学図書館員が自分の職場である大学図書館にしながら演習に加わることができた。これまで、大学の講義や演習に外部のアドバイザーが参加する場合は、当該時間に講義室に向いてもらう必要があった。昼間の授業が行われる時間は、一般的に大学や民間企業の業務時間中であることが多いため、こうした人たちにアドバイザーを頼むことは時間的、物理的制約から困難が生じていた。今後も時間的制約の問題は生じるであろうが、物理的な制約については、Twitter により解決が図られ、様々な立場の人々を大学の講義へと巻き込める可能性が出てきたと言えよう。

また講師という観点だけでなく、参加する受講生の側にとってもメリットは大きい。今回、二大学間で授業時間も場所も異なるにもかかわらず、お互いの受講生が交流を果たすことができた。特殊なソフトウェアを必要とせず、PC のブラウザや、携帯電話で参加できたことがそのハードルを低くしたのだと思われる。さらに、ICT のツールの1つとして Twitter を位置づけた場合にも利点がある。それは、大学教育で用いられている CMS (Course Management System) やツールは、基本的に受講生の身分と連動しており、卒業などで身分が変わった段階で使えなくなってしまう。しかし、Twitter はそうした身分と連

動していないので、受講生の身分が変わっても使い続けることが可能である。このため演習が終わっても、学んだことが無駄になる部分が少ない。さらに最初から外に開かれており、成功、失敗を含め多くの事例が蓄積されていることから、こうしたツールを用いる際に必要な倫理面への注意喚起が行える利点があると思われる。今回、倫理面の配慮については十分な時間を割けなかったが、自分の発言に「責任が生じる」と考えた受講生が現れたのも、こうした Twitter の性質が影響していたのかもしれない。

### 4.3 今後配慮すべき留意点

最後に、今後配慮すべき4つの留意点を挙げる。

1 点目はアカウント登録時の問題である。Twitter では同一 IP アドレスから一度に連続してアカウント登録を行おうとした際には、不正利用と認識され、アクセスが制限されることがある。通常の利用であれば問題はないが、大学の実習室では Proxy サーバーを介して、同一 IP アドレスを共有している場合があるため、例え同一人物が一度に登録しようとしなくても、この制限に該当する場合がある。実際に青山学院大学では、登録作業を10人程度行った時点で、Twitter の登録が突然できなくなった。これを回避するためには、時間差をつけてアカウント登録を行わせるか、あるいは、他の IP アドレスを持つ回線をバックアップとして用意しておく必要がある。

2 点目は「SPAM」アカウントへの対応である。Twitter には多くのアカウントが存在するが、その中には、こちらの同意なく無差別にメッセージを送りつける通称「SPAM アカウント」が存在する。これらのアカウントをフォローすることは好ましくないとされるが、今回の実践では「SPAM アカウント」をフォローしてしまう受講生がいたことが1週目の授業終了後に判明した。2週目にフォローを外し、「SPAM アカウント」として Twitter 社に報告するよう指導したが、このようなことが起こる前に事前に指導することが必要だと思われる。

3 点目は、遅刻者、欠席者に対するサポートである。今回、これらの受講生に対するサポートは予想以上に必要であった。「他者とつながる」ことが前提であるサービスを実習に用いる上では、受講生の理解の進捗状況はほぼ同じであることが望ましい。今回は欠席者向けに授業内容を詳細に記述しておいたレジュメを公開し、授業の進捗に追いつくように指導した。その結果、2週目ではじめて参加した受講生であっても、それほど困難なく授業に参加できていた。ただし今回については少人数授業であったからこのようなサポートが可能であったとも言える。いずれにせよ、ソーシャルツールを実習で用いる際には、自学自習が可能な説明資料を用意し、例えツールの使い方を説明する授業に欠席したとしても、次回以降の授業では、出席した受講生と同じように始められる環境を整えておくべきである。

4 点目は、授業展開、教材、指導方法の見直しである。受講生アンケートで消極的な評価を行った回答では、これらについて見直しが必要なことが示唆されていた。次回以

降の実践を行う前に、改めて見直すべきである。

以上検討してきたように、本実践では Twitter を導入することで、授業時間も場所も異なる二大学間をつなぐことができ、本来であれば参加が難しい外部の第三者を授業へと巻き込むことができた。そして、受講生アンケートの結果を見る限りでは多くの受講生にとって、効果的な授業が展開できたと考えられる。しかし、教材や指導法で工夫が必要だと思われるコメントが見られ、技術的な制約や欠席者に対するサポートの難しさが留意点として挙げられた。今後も実践を行う中で、これらがどう解決できるか試行錯誤を重ねていきたい。

#### 参 考 文 献

- 1) Lifo-第一話「りふおがたり～Lifo さんが語る」: Jcross 広場 [http://www.jcross.com/plaza/lifo\\_03ootani.php](http://www.jcross.com/plaza/lifo_03ootani.php) [accessed 2011-06-15].
- 2) 'Embedded Librarian' on Twitter Served as Information Concierge for Class. <http://chronicle.com/blogs/wiredcampus/embedded-librarian-on-twitter-served-as-information-concierge-for-class/30000> [accessed 2011-05-03]
- 3) 池田光史ほか. 特集電子書籍入門読み方, 買い方はこう変わる!. 週刊ダイヤモンド, 2010, vol.98, no.42, p.30-33.
- 4) EPUB と協調展開する「DAISY」: 進む電子書籍化, 「忘れられていた」バリアフリーの取り組み <http://plusd.itmedia.co.jp/pcuser/articles/1004/06/news063.html> [accessed 2011-05-03]
- 5) 池田光史ほか. ウェブ立ち読みだけでないアマゾンが変える読書体験. 週刊ダイヤモンド, 2010, vol.98, no.42, p.56-57.

A practice of twitter as a communication tool in two different university classes. Fukuji IMAI, Yukinori OKABE (Graduate School of Education, the University of Tokyo (IMAI), Faculty of Education, University of KinDAI Himeji (OKABE). Fukuji IMAI, Library and Information Science Labo. Faculty of Education Bldg., Second floor 221 the University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033 JAPAN)

**Abstract:** This paper describes a cooperative practice using Twitter between two universities. Twitter is the most popular social networking tool in Japan. We offered a class about electronic books between two universities. In the class, we gave an assignment of report and feedback about using Twitter. The situation of the two classes was different of place, time, and member. Using Twitter, we could communicate each other beyond those boundaries. Even a librarian could join the class. Considering students' feedback, our teaching scheme and materials have a room for improvement.

**Keywords:** cooperative class / electronic books / twitter / lesson practice example / information and communication technology